

職業経験年数の違いによる介護職の看取りに対する思い

Recognition of end-of-life care of care workers due to the difference by the duration of work

山本 道代* 高橋 順子** 大浦 麻絵***

Michiyo Yamamoto, Yoriko Takahashi and Asae Oura

Abstract

The aim of the present study revealed the recognition of end-of-life care of care workers due to difference in duration of work. The subjects were care workers working at long-term care welfare facilities for the elderly in A City. The subjects were classified by length of work, and were divided into a less-than-five-years group and an over-five-years group. To data showed that 74 subjects had a free description column in the questionnaire survey. The descriptive content was analyzed by the qualitative inductive method. The recognition of end-of-life care of the less-than-five-years group was structured into three categories and six subcategories. The three categories were anxiety for being responsible for care in lack of information, motivation to learn as a professional, and conflict with end-of-life care in facilities. The six subcategories were anxiety from understaffed night shift, lack of information, supporting end-of-life care, necessity of knowledge and experience, difference between the facility policy and need of the resident or family, and reluctance ending. The recognition of end-of-life care of the over-five-years group was structured into three categories and nine subcategories. The three categories were supporting end-of-life care among all staff, learning and pride obtained from the experience of end-of-life care, and pressure by end-of-life care. The nine subcategories were supporting end-of-life care in the whole facility, usual life for the resident, necessity of family support, pride, opportunity to reflect on end-of-life care, opportunity to improve as a professional, opportunity to cultivate a view of life and death, pressure, and lack of staff. Our results suggest different support for both groups.

I. はじめに

わが国の高齢化の進展に伴い、2014年の年間死亡者数は約127万人に達した。今後も年間死亡者は増え続け、2040年頃には約167万人のピークを迎えると推測されている⁽¹⁾。わが国にとって看取りの場を整えることが喫緊の課題であり、その取り組みのひとつが2006年の介護保険法改正における特別養護老人ホーム（以下、特養）の看取り加算新設であった。2013年の全国統計によると、死亡者全体に占める特養の死亡割合は5.3%であった⁽²⁾。この割合は10年間で約2.8倍に増加しており、1年間で7万人弱が特養で死亡している。今後も特養での死亡者の増加は必至であろう。

特養で入所者に対して援助を担うのは主に介護

職である。介護職は入所者の日常生活の援助に加えて看取りの実践が求められるが、新人介護職員は看取り介護に行き詰まりを感じて次の看取りに不安を感じていることが明らかにされている⁽³⁾。清水らは、介護職が看取りを避けたい理由は終末期ケアに関する知識や経験の少なさであると述べている⁽⁴⁾。内田は、現代社会は自宅死が減少したため看取りの経験が少なくなったこと、高齢者の看取りの場が病院から介護施設に移動すること、介護福祉士が高齢者の看取りを期待されていることを挙げ、介護福祉士教育における看取りの教育の必要性を述べており⁽⁵⁾、将来的には看取りを学んだ介護職員が現れることが予測される。しかし現状において、介護労働に従事する者は無資格の

* 北海道科学大学保健医療学部看護学科

** 天使大学看護栄養学部看護学科

*** 札幌医科大学医学部公衆衛生学講座

者、130 時間の介護職員初任者研修を受けた者、専門学校や 4 年制大学を卒業した介護福祉士など、多様であり、全体に占める介護福祉士資格保有率は約 35%である⁽⁶⁾。教育背景が異なる介護職が混在する現状において、介護職が看取りに対して前向きに取り組めるサポートが必要であろう。Abe は、看取りに対する前向きさと職業経験年数は関連していると述べている⁽⁷⁾。坂下らは、看取りに積極的に取り組む介護職員を調査しており、対象となった介護職員は 3 年 11 ヶ月から 21 年までの経験年数を有していた⁽⁸⁾。さらに Yamamoto らは、看取りに対する態度の前向きさと 5 年以上の職業経験年数が有意に関連していることを明らかにしている⁽⁹⁾。介護職の看取りに対する態度は職業経験を重ねて変化し、その変化が起こる時期として 5 年が節目であると推察される。

本研究は、職業経験年数の違いによる介護職の看取りに対する認識の違いを明らかにし、経験年数に適したサポートの内容を検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

A 市の研究協力が得られた特養 19 施設に勤務する介護職 252 名とした。介護職とは、特養で日常的に介護業務に携わる者とした。

2. データ収集方法

自記式質問紙調査を実施した。施設の窓口となる職員が施設内の介護職に調査票を配布した。回答後の調査票は返信用封筒に入れ、研究者宛に郵送で回収した。

3. 調査項目

基本属性として、年齢、性別、職業経験年数、介護福祉士資格保有の有無、看取り経験の有無、信仰宗教の有無を尋ねた。看取りに対する思いは、自由記述の内容をデータとして用いた。調査票の最終頁に「看取りに関するご意見ご感想などをご自由にご記入くださいますようお願いいたします」と記し、20×16cm の枠を設けた。

4. 期間

2014 年 11 月 15 日から 2014 年 12 月 31 日

5. 分析方法

職業経験年数が 5 年未満の群（以下、5 年未満群）および職業経験年数が 5 年以上の群（以下、5 年以上群）に分類した。各群の平均職業経験年数を

示し、性別、年齢、介護福祉士資格保有の有無、看取り経験の有無、信仰する宗教の有無を統計学的に比較した。分析には SPSS を用いた。

看取りに対する思いの記述内容は質的帰納的方法で分析を行った。「利用者」「入居者」「入所者」「対象者」「本人」など、特養で介護を受ける者の表現は「利用者」に統一した。「看護職」「看護師」「看護」は「看護職」に統一した。「介護職」「介護員」「介護」「我々」は「介護職」に統一したうえで分析に用いた。初めに、1 人の回答全体を文脈単位とし、看取りに対する介護職の考え 1 つのみを含む単語、句、文章を記録単位として抽出した。次に、類似のキーワードを含む同一記録単位群に分類した。さらに、同一記録単位群の類似性に従い分類しサブカテゴリとした。最後に、より抽象度の高いカテゴリを同定しカテゴリネームをつけた。分析の信頼性を担保するために、分析過程において介護および看護に精通した 3 名の研究者で討議を行った。

III. 倫理的配慮

対象者には、研究の趣旨、方法、匿名性の確保、結果の公表方法に加え、調査への協力は自由意志であり撤回可能であること、協力しなくても不利益を被らないことを文書で説明し、書面で同意を得た。本研究は、札幌医科大学倫理審査会の承認を得て実施した（承認番号 24-2-41）。

IV. 結果

回答が得られた 190 名（回収率 75.4%）のうち 78 名の自由記述欄に記載があった。調査に対する問い合わせなど施設での看取りに関係がない記述を除外し、74 名の記述内容を分析に用いた。

1. 対象者の基本属性

5 年未満群と 5 年以上群の基本属性を表 1 に示した。5 年未満群は 18 人、5 年以上群は 56 人であった。職業経験年数は、5 年未満群 3.6 ± 0.9 年、5 年以上群 11.0 ± 5.0 年であった。5 年未満群は、平均年齢が 37 歳、女性が 13 人（72.2%）、介護福祉士資格保有者 7 人（38.9%）、看取り経験を有する者 15 人（83.3%）、信仰する宗教を持つ者は 4 人（22.2%）であった。5 年以上群は、平均年齢が 40 歳、女性が 41 人（73.2%）、介護福祉士資格保有者は 52 人（92.9%）、看取り経験を有する者 54 人（96.4%）、信仰する宗教を持つ者は 4 人（7.1%）

表1 対象者の基本属性

項目 / 内容	職業経験年数5年未満 n=18	職業経験年数5年以上 n=56	P値 ¹⁾
職業経験年数	3.6 ±0.9	11.0 ±5.0	-
年齢	37.0 ±11.8	40.3 ±10.8	0.275
性別 / 女性	13 (72.2)	41 (73.2)	1.000
資格 / 介護福祉士	7 (38.9)	52 (92.9)	>.001
看取り経験 / あり	15 (83.3)	54 (96.4)	0.055
信仰宗教 / あり	4 (22.2)	4 (7.1)	0.092

1) カイ2乗検定およびStudentのt検定

表中の数字はn(%)および平均±標準偏差を表す。

であった。介護福祉士資格保有率は、5年以上群が5年未満の群より有意に高かった。その他の基本属性について、5年未満群と5年以上群に有意差はなかった。

2. 5年未満群の看取りに対する思い

5年未満群は42の記録単位が抽出された。施設の看取りに関係がない記録単位を除外し、40の記録単位を11の同一記録単位群に分類した。これらの同一記録単位群を6サブカテゴリ、3カテゴリに集約した結果を表2に示す。以下、カテゴリを【】、サブカテゴリを〈〉、記述内容を「」で示す。

第1カテゴリ【情報が少ないなかでケアを担う不安】は16記録単位から形成され、全体の40.0%を占めた。〈職員配置が少ない〉と〈情報が少ない〉の2サブカテゴリで構成された。このカテゴリは、看取りに必要な情報が入手できないためケアに不安を感じ、職員が少ない夜勤帯はその不安がさらに強くなることを表している。〈職員配置がすくない〉は、「特に夜勤の場合は看取りの内容をあまり理解しないままケアにあたっている」や「夜勤帯は

精神面での疲労が特に多い」、「20人を1人で夜勤しているため、夜間は不安と発見時、呼吸停止のショックは大きい」と記述されていた。〈情報が少ない〉は、「家族の意向などまで、普段の情報収集で知り得ることは少ない」、「医療と介護の連携がうまくとれていない」、「利用者の看取りの指針は看護職が作成する」と記述されていた。

第2カテゴリ【介護職としての学びの動機】は13記録単位から形成され、全体の32.5%を占めた。〈自然に訪れる最期の手伝い〉と〈知識と経験が必要〉の2サブカテゴリで構成された。このカテゴリは、普段の生活の延長に看取りがあり、それを支えるためには知識と経験を必要とする認識を表す。〈自然に訪れる最期の手伝い〉は、「元気なうち、物が食べられるうちにできることをしたり、楽しい思いをしてもらいたい」、「人生の最期に向かってお手伝いできるため素晴らしい」、「余命がみじかい人だけでなく全ての利用者が看取り」と記述されていた。〈知識と経験が必要〉は、「知識を得る為に施設内の講習などに参加したい」や「死を目の

表2 職業経験5年未満の介護職の看取りに対する思い

カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位数	(%)
1. 情報が少ないなかでケアを担う不安	1) 職員配置が少ない夜間が不安	11	(27.5)
	2) 情報が少ない	5	(12.5)
		16	(40.0)
2. 介護職としての学びの動機	3) 自然に訪れる最期の手伝い	7	(17.5)
	4) 知識と経験が必要	6	(15.0)
		13	(32.5)
3. 施設での看取りに対する葛藤	5) 施設の方針と利用者や家族の思いの乖離	6	(15.0)
	6) 不本意な結末	5	(12.5)
		11	(27.5)
		40	(100.0)

前にした時、落ち着いた行動が出来る介護職になりたい」と記述されていた。

第3カテゴリ【施設での看取りに対する葛藤】は11記録単位から形成され、全体の27.5%であった。〈施設の方針と利用者や家族の思いの乖離〉と〈不本意な結末〉で構成された。このカテゴリは、利用者や家族の思いに添えないまま看取りを実践している葛藤を表している。〈施設の方針と利用者や家族の思いの乖離〉は、「施設で終末を迎えたいと考えている人は少数で、医療職だけが進めたいと考えていると思います」「許されるのであるなら自宅で死にたいと考えている方がほとんどだと思います」「家族からすると、施設の区別はもちろん”延命”に対する知識に大きな差や違いがある」と記述されていた。〈不本意な結末〉は、「延命ではなくても家族が来る数分間でも息を休めて欲しい気持ちがありました」や「もっと出来ることはなかったのかと思う」と記述されていた。

3. 5年以上群の看取りに対する思い

5年以上群は126の記録単位が抽出された。施設の看取りに関係がない記録単位を除外し、122の記録単位を20の同一記録単位群に分類した。これらの同一記録単位群を9サブカテゴリ、3カテゴリに集約した結果を表3に示す。

第1カテゴリ【皆で支えるその人らしい最期】は49記録単位から形成され、全体の40.2%を占めた。〈施設全体での取り組み〉、〈その人らしいいつもの暮らし〉、〈家族の協力が必要〉の3サブカ

テゴリで構成された。このカテゴリは、施設が看取りの方針を明確にし、看取りの環境を整える基盤があるうえで、職員と家族が協力してその人らしい最期を支えることを意味する。〈施設全体での取り組み〉は、「看取りは介護職1人だけではできない」、「施設全体の方針を統一する必要がある」、「看取りの環境を整える」と記述されていた。〈その人らしいいつもの暮らし〉は、「いつもと同じ暮らしの中に看取りがある」、「その人その人で状況が違う」、「こちら目線ではなく利用者の人生でどのような最期が望ましいのかをトータルで考え共に生活することが大切」と記述されていた。〈家族の協力が必要〉は、「家族に見守られて旅立てればよい」や「利用者と家族の意向を尊重する」と記述されていた。

第2カテゴリ【経験から得る学びや誇り】は46記録単位から形成され、全体の37.7%を占めた。

〈誇り〉、〈自分のケアを内省する機会〉、〈介護職として成長する機会〉、〈死生観を涵養する機会〉の4サブカテゴリで構成された。このカテゴリは、看取りの経験は介護職としての知識や技術を高めることにとどまらず、死生観の涵養など自己の精神性に深く関与していることが推測されたものである。〈誇り〉は、「人生の最終局面に関わらせていただくことはとても価値のあること」と記述されていた。〈自分のケアを内省する機会〉は「自己満足になっていないか」という振り返りや「もっとこうすれば良かった」と次につながる課題の発見が

表3 職業経験5年以上の介護職の看取りに対する思い

カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位数 (%)	
1. 皆で支えるその人らしい最期	1) 施設全体での取り組み	20	(16.4)
	2) その人らしいいつもの暮らし	15	(12.3)
	3) 家族の協力が必要	14	(11.5)
		49	(40.2)
2. 経験から得る学びや誇り	4) 誇り	17	(13.9)
	5) 自分のケアを内省する機会	13	(10.7)
	6) 介護職として成長する機会	9	(7.4)
	7) 死生観を涵養する機会	7	(5.7)
		46	(37.7)
3. 看取らざるを得ない重圧	8) 重圧	16	(13.1)
	9) 職員不足	11	(9.0)
		27	(22.1)
		122	(100.0)

記述されていた。〈介護職として成長する機会〉は、「看取り前後の対応も幅広くできるようになりたい」と記述されていた。〈死生観を涵養する機会〉は、「死について考えることは生について考えること」や「死について考えるようになった。答えはまだはっきりしていない」と記述されていた。

第3カテゴリ【看取らざるを得ない重圧】は27記録単位から形成され、全体の22.1%であった。

〈重圧〉と〈職員不足〉の2カテゴリで構成された。このカテゴリは、忙殺される日常業務に看取りが重なり自分に限界を感じている状況を表している。〈重圧〉は、「様々なストレスで自分が死んでしまうようだ」、「精神的・肉体的負担のみが大きくなっている」、「看取りは嫌だしやめたい」と記述されていた。〈職員不足〉は、「せっかくのユニットケアだが職員がいない」や「マンツーマンの対応は難しい」と記述されていた。

V. 考察

本稿では、5年未満群と5年以上群の介護職の看取りに対する思いの類似点と相違点を明らかにし、経験年数に応じた適切なサポートの内容を考察する。

5年未満群および5年以上群のいずれも女性が70%程度で平均年齢が40歳前後であり、これは全国調査と同様の傾向を示した⁽⁶⁾。また、全国調査結果では、介護労働に従事する者全体に占める介護福祉士資格保有者率は約35%である。5年未満群は38.9%であり全国的な傾向と同様であったが、5年以上群は92.9%と介護福祉士資格保有者率が高かった。信仰宗教を持つ者は両群ともに少なく、特定の宗教の死生観の影響を受けていないことが推察された。

両群の共通点として、職員不足と医療職不在による不安や重圧が挙げられる。5年未満群は【情報が少ない中でケアを担う不安】として表れ、5年以上群は【看取らざるを得ない重圧】として表れていた。全国調査によると、56.5%の介護事業所が介護職員不足であり、43.1%の介護事業所で看護職員が不足している慢性的な人材不足の状態である⁽⁹⁾。「様々なストレスで自分が死んでしまうようだ」、「20人を1人で夜勤しているため、夜間は不安と発見時、呼吸停止のショックは大きい」という介護職の記述は人手不足の現状を反映しており、「マンツーマンの対応は難しい」や「看取りの内容を理解

しないままケアにあたっている」と利用者へ十分なケアを行えないストレスへとつながっていた。介護職員は今後の需要拡大が推測されており、国は介護人材の確保対策を様々に打ち出している⁽¹⁰⁾。介護職員が充足し、利用者が安心して生活するために、一刻も早い対策の効果の発現が待たれる。

5年未満群の【介護職としての学びの動機】と5年以上群の【経験から得る学びや誇り】は、いずれも介護職としての成長を表すカテゴリである。しかし、看取りの経験の捉え方に相違点がみられた。5年未満群は、看取りの経験を〈不本意な結末〉として記述し、【施設での看取りに対する葛藤】カテゴリを形成していた。一方で5年以上群は看取りの経験を知識や技術を高めることにとどまらず、死生観の涵養など自己の精神性に深く関与させていることが推測された。さらに「看取り前後の対応も幅広くできるようになりたい」と記述していることから、5年以上群は5年未満群よりも看取りをより深く広く捉えていると考えられる。鈴木らは熟練スタッフが看取りケアを計画段階から亡くなった後まで視野に入れていることを明らかにしている⁽¹¹⁾。鈴木らの調査対象者である熟練スタッフは、平均勤務年数は約20年であったが、本研究の5年以上群も同様の傾向を示していると考えられた。

5年未満群の【施設での看取りに対する葛藤】は、「施設で終末を迎えたいと考えている人は少数で、医療職だけが推めたいと考えていると思います」や「看取る状況になった時の家族への対応や関わりの方が大変」と医療職との共通認識や家族への対応に苦慮している様子が記述されていた。それとは対照的に5年以上群は【皆で支えるその人らしい最期】として〈施設全体〉を巻き込み〈家族の協力〉を得て看取りを実践していた。石井らは、5年以上の経験を持つ看護職と介護職の終末期ケア行動の中で、利用者の意思の尊重と家族への説明に関するケアは両職種の違いがなかったと述べている⁽¹²⁾。介護職は、5年間の経験を重ねることで利用者や家族および医療職との関係性をより良く保つスキルを獲得すると考えられる。本研究の5年以上群の介護職は「こちら目線ではなく利用者の人生でどのような最期が望ましいのかをトータルで考え共に生活することが大切」と記述していた。自分自身の価値観を超えて、利用者の尊厳を大切にケアを提供していると推測された。

看取りを実践する介護職へのサポートとして、両群の共通点として挙げられた職員不足と医療職不在による不安や重圧が最優先であろう。2006年の介護保険法改正以降、国が推し進めてきた看護職の配置や夜間連絡体制など一層の充実が望まれる。5年未満群へは、精神的なサポートが求められる。看取りを〈不本意な結末〉であると捉えることは、利用者への申し訳ない気持ちや自身への無力感、施設や他の職種への不信感にも繋がる。平松の調査では勤務する施設で終末期ケアに関わる職員の精神面へのケアがなされていると思う介護職は29%であった⁽¹³⁾。5年未満の介護職が看取りを振り返り、自己肯定感を得る機会を意図的に作らなくてはならない。施設内カンファレンスを開催して看取りを肯定的に振り返る、研修への参加など施設としての取り組みが必要であろう。一方、5年以上群の介護職に対しては、経験から得た学びや誇りを積極的に活用する場の創出が有効であると考え。自分自身の実践を他者に伝えることによって自分のケアを内省する機会となる。また、他者を教えることで自己効力感を得ることができると考える。また、5年以上群へのサポートとしては死生観の涵養が有効であろう。河村は、死を充実した生の先にあるものとして捉えることで、介護職自身のモチベーションや充実感が高まることを明らかにしている⁽¹⁴⁾。5年以上群の介護職は、介護職としての経験を重ねることで、死生観を涵養する準備が整ったと推察される。平川らは終末期ケアの質を高めるために、死生観を涵養する研修を実施したが、研修前後で死生観の変化はみられなかったと報告している⁽¹⁵⁾。しかし、その反対に、研修の結果、死と向き合う態度が高まったという報告もある⁽¹⁶⁾。死生観を涵養する研修は、経験5年以上の介護職を対象とすることで効果的であると考え。

研究の限界として、施設体制の調査項目が少ないため、施設体制に関する記述の客観性が担保できなかった。施設の体制と介護職の記述の整合性を確認する必要がある。また、5年以上群の介護福祉士資格保有率が高かった。介護福祉士と訪問介護員は教育背景が異なり、結果に偏りを生じている可能性を否定できない。今後は対象者数を増やし結果の妥当性を高める必要がある。

VI. 結論

経験5年未満の介護職の看取りに対する思いは、【情報が少ないなかでケアを担う不安】、【専門職としての学びの動機】、【施設での看取りに対する葛藤】の3カテゴリと、〈職員配置が少ない夜間が不安〉、〈情報が少ない〉、〈自然に訪れる最期の手伝い〉、〈知識と経験が必要〉、〈施設の方針と利用者や家族の思いの乖離〉、〈不本意な結末〉の6サブカテゴリで構成されていた。5年以上の経験を持つ介護職は、【皆で支えるその人らしい最期】、【経験から得る学びや誇り】、【看取らざるを得ない重圧】の3カテゴリと、〈施設全体での取り組み〉、〈その人らしいいつもの暮らし〉、〈家族の協力が必要〉、〈誇り〉、〈自分のケアを内省する機会〉、〈介護職として成長する機会〉、〈死生観を涵養する機会〉、〈重圧〉、〈職員不足〉の9サブカテゴリで構成されていた。経験年数に応じた異なる内容のサポートの必要性が示唆された。

引用文献

- (1) 内閣府：平成25年版高齢社会白書（全体版）、
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/zenbun/s1_1_1_02.html（アクセス日：2016年4月1日）
- (2) 総務省統計局：統計表一覧-政府統計の総合窓口 死亡の場所別にみた年次死亡数、死亡の場所別にみた年次死亡数百分率、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do%3Fflid%3D000001108740>（アクセス日：2016年5月19日）
- (3) 小林尚司，木村典子，特別養護老人ホームの新人介護職員の看取りのとらえ方，老年社会科学，32（1），2010，pp.48-55.
- (4) 清水みどり，柳原清子，特別養護老人ホーム職員の死の看取りに対する意識－介護保険改定直前のN県での調査－，新潟青陵大学紀要，7，2007，pp.51-62.
- (5) 内田富美江，介護福祉養成教育における死と看取り教育の必要性，川崎医療短期大学紀要，28，2008，pp.53-58.
- (6) 介護労働安定センター：平成25年度介護労働実態調査結果について、http://www.kaigo-center.or.jp/report/pdf/h25_chousa_kekka.pdf（アクセス日：2016年4月1日）
- (7) Abe K, Ohashi A. Positive effects of experience in terminal care on nursing home staff in Japan, Am J Hosp Palliat Care, 28, 2011,

389-392.

- (8) 坂下恵美子, 西田佳世, 岡村絹代, 特別養護老人ホームの看取りに積極的に取り組む看護師・介護士の意識, 南九州看護研究誌, 11 (1), 2013, pp.1-9.
- (9) Yamamoto M, Ohnishi H, Oura A, et al. Factors Influencing Attitudes toward End-of-life Care by Care workers at Special Nursing Homes for the Elderly: A Cross-sectional study in Japan, 札幌医学雑誌, 84, 2015, pp.27-33.
- (10) 厚生労働省: 介護人材確保対策について、
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000056770.pdf (アクセス日: 2016 年 4 月 19 日)
- (11) 鈴木亨, 流石ゆり子, 終末期にある高齢者がその人らしい最期を迎えるために必要なケア～介護老人福祉施設熟練スタッフへのインタビューより, ホスピスケアと在宅ケア, 20 (3), 2012, pp.275-285.
- (12) 石井京子, 牧洋子, 北村育子, 特別養護老人ホームにおける終末期ケア行動に関する研究－看護師とケアワーカーの役割認知と実践の比較－, 死の臨床, 33 (1), 2010, pp.86-93.
- (13) 平松万由子, 介護老人保健施設における終末期ケアに関する実態調査－看護職・介護職の認識に焦点をあてて－, 三重看護学誌, Vol.13, 2011, pp.147-154.
- (14) 河村諒, 高齢者施設における介護職員のバーンアウトに影響を与える死生観の検討, ホスピスケアと在宅ケア, Vol.21, No.3, 2013, pp.303-309
- (15) 平川仁尚, 葛谷雅文, 植村和正, 介護老人保健施設の介護職員を対象とした終末期ケア教育の効果, 医学教育, Vol.40, No.3, 2009b, pp.197-200.
- (16) 平川仁尚, 安井浩樹, 青松棟吉, 他, 高齢者の終末期ケアを実践する上級介護職員のためのワークショップの効果, ホスピスケアと在宅ケア, Vol.19, No.3, 2011, pp.316-323.

参考文献

舟島なをみ, 質的研究への挑戦第2版、医学書院、東京、1999.